



# 学生の能力を伸ばす取り組み

## 好評企画

### 2014年度教育支援センター

#### 第2回FD研修会 開催

P2~P5

##### ■ 社会が求めるジェネリックスキルの評価と育成について

～ジェネリックスキル測定PROGから見る東海大学生の課題について～

#### 第3回FD研修会 開催

P6~P9

##### ■ 地域活動におけるジェネリックスキルの養成について

#### 第4回FD研修会 開催

P10~P14

##### ■ PA型教育導入に向けて～PAとは何か～

FD研修会を収録したDVDを貸し出しています  
(学内のみ)

問い合わせ先:教育支援センター教育支援課  
shien@tsc.u-tokai.ac.jp

教育支援センターは、To-Collabo推進室と共催で教育支援センターFD研修会を開催しました。

本学は文部科学省の「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択されています。教育改革プログラムである本事業では、地域再生・活性化と併せて人材育成に主眼がおかれており、学生の能力を伸ばす取り組みであること、また、その成果を客観的に示すことが求められます。

今号の『COMMUNICATION NEWS UP』では、ジェネリックスキルに関する第2回、第3回FD研修会の講演内容を掲載するとともに、第4回FD研修会として、2014年11月に派遣されたPublic Achievement(以下、PA)についての米国研修(視察)団の報告と本学でのPA型教育実践事例報告が行われましたので、その内容をご紹介します。



■第2回FD研修会 開会挨拶  
(飯塚浩一 To-Collabo推進室次長)



■第3回FD研修会



■第4回FD研修会での研修体験ワークの様子

# 社会が求めるジェネリックスキルの評価と育成について

～ジェネリックスキル測定PROGから見る東海大学生の課題について～

株式会社 リアセック取締役COO 近藤 賢 氏

2014年度第2回教育支援センターFD研修会(2014年10月29日開催)より

**開会挨拶** 飯塚浩一 To-Collabo推進室 次長  
(文学部広報メディア学科 教授)

本日は、実際に本学でもいくつかの学部やチャレンジセンターで実施したPROG(Progress Report On Generic skills)テストを通して、社会に出てから必要な力をどのように測定していくべきか、あるいはそこから見えてくるものについて(株)リアセックの近藤 賢様にご講演いただきます。

大学の専門教育というのは、ある意味で普遍的な知識や技術を追求するもので、一般の身近な生活に直結するものを追求しているわけではないと思います。他方で、人は大学を卒業してから過ごす時間の方がずっと長く、その意味で、昔から、大学は社会や企業に役に立つことをやっているのかと問われますが、私は、企業にとって役に立つことを教えるのではなく、本人にとって役に立つことを教えるのが大学であると思います。社会人として必要な力とは何か、をテーマとした時に、それを数値で測ることは難しく、また、答が出るものではないと思いますが、測定をする試み自体が、大学で行っている教育が社会にどうつながっているのかということ、指導する側も学んでいる側も考えるきっかけになるのではないかと思います。我々は、専門教育を行いつつも、社会から何が求められているのかということ、頭の片隅に置くだけでも大きな違いを生むと思います。そうした一つの切り口、手段として、ジェネリックスキルの測定が位置付けられると良いのではないかと思います。

**社会が求めるジェネリックスキルの評価と育成について**  
株式会社 リアセック 取締役COO 近藤 賢 氏



私は東海大学の卒業生で、同級生には、新聞社の支局長を務めた方や、球団の社長等がいます。当時は色々な学生がいて、その中で揉まれたことがその後の社会人人生で大きく影響したのではないかと思います。

本日は、PROGテストの概要を説明した後に、東海大学での試行結果について紹介します。

## ■ジェネリックスキルの評価

大学教育の評価をどのようにするのは、実に難しいテーマであると思います。また、ここでいうジェネリックスキルは、それほど明確に定義づけられる能力ではありません。ですか

ら、評価をすることが目的ではなく、あくまでも手段として活用し、学生の力を伸ばしていく方向に少し工夫ができれば良いと思っています。

2013年3月の中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議のまとめにもあるように、学士課程教育の中でジェネリックスキルを伸ばし、それを成果として測ることが求められています。東海大学では、「4つの力」を東海大学が育成する力として、その育成に取り組まれていると思いますし、同様に多くの大学が、ジェネリックスキルを科目の中で育成することに取り組んでいます。

ジェネリックスキルを科目の中に取り入れる場合、一番難しいのは、その評価です。東海大学のシラバスでも「4つの力」が定義され、達成度の評価方法についてはそれぞれに既に工夫されていると思います。評価の手法には色々ありますが、「集い力」を例に挙げると、学生が自分でどのように集めたか、協働したかについて間接的に自己評価するという方法、そして、直接的に測る場合は、レポートやプレゼンテーション、卒業論文等のひとまとまりの作品を教員がルーブリック等を用いて評価する方法があります。しかし、これらの方法で評価をした時に、全ての学生の能力を評価できるのかという実現可能性の問題にぶつかります。また、妥当性(育てたい力を評価できているのか)、信頼性(何度測っても同じような数値が出せるのか)等の問題も出てきます。このような問題により、一つの尺度だけでは測りきれず、成績やミニッツペーパー、毎回の出欠、課題の提出等、総合的に学生の能力を評価する必要がありますが、実際には、教員の負担が非常に大きく、測りようがないというのも現実です。そこで、2012年に(株)リアセックと(学)河合塾が、学生の汎用的技能を定量的に統計処理しながら測定するためにPROGというアセスメントを作成しました。

## ■リテラシーとコンピテンシー

PROGテストは、リテラシーとコンピテンシーという2つの領域に分かれています。リテラシーは(学)河合塾が作成し、コンピテンシーは(株)リアセックが作成しています。リテラシーは、新しい問題や経験のない問題に対して、知識を活用して問題を解決する能力で、修得した知識を現実の問題に活用することで育てられます。つまり、知識の量を問うのではなく、学生が知識を使ってどのように問題解決にあたれるかを測っています。コンピテンシーは、社会人基礎力に代表されるような周囲の状況に上手く対処するために身に付けた、意思決定・行動指針等の特性のことです。経験を振り返り、モデ

ルを意識して行動することで育成されます。いわゆる、コミュニケーション力や態度、主体性といわれるものです。これらの尺度を構成するときに我々が参照したのは、OECDのDeSeCoプロジェクトのキー・コンピテンシーです。学士課程を卒業した者に求められる能力として「異質な集団で交流する」、「道具を相互作用的に活用する」、「自律的に活動する」の3つがキー・コンピテンシーとなっています。

PROGのリテラシーは、特に「道具を相互作用的に活用する」に注目して構成され、また、新学習指導要領の基本方針との対応も試みています。そして、ペーパーテストで測れる能力は何かを問題解決の6つのプロセス(情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力、表現力、実行力)に沿って整理し、情報収集力、情報分析力、課題発見力、構想力について測定しています。具体的には、「情報収集力」では、情報源の特性、目的に応じた情報検索の方法等、出てきた情報を自分でどう評価していくのかを見えています(図1)。「情報分析力」では、正確な読み取りと考察、複数のグラフの読み取りの統合等、実際にグラフを見て、グラフから事実を読み取る力を見えています。「課題発見力」では、問題の洗い出し、ブレインストーミング、問題の構造化、原因追求等、問題を少し論理的に組み合わせる力を見えています。「構想力」では、問題解決の手順を見えています。

一方で、PROGのコンピテンシーも同じようにキー・コンピテンシーを参照しながら、尺度構成をしています。キー・コンピテンシーのうち、「異質な集団で交流する」、「自律的に活動する」をベースに、更に、新卒求人サイトの大学新卒採用要件をテキストマイニングし、再構成しました。対課題基礎力、対人基礎力、対自己基礎力に分け、更に、中分類を9個(課題発見力、計画立案力、実践力、親和力、協働力、統率力、感情制御力、自信創出力、行動持続力)、小分類を33個とし、細かく能力を構成したことで社会人基礎力や学士力、東海大学の「4つの力」とも相関を取って測定できるようになっています。また、PROGでは、コンピテンシーの設問を工夫しています。コンピテンシーを測るテストはいくつかありますが、例えば、「私は責任感があるほうだ」、「私は課題をあきらめずに最後まで取り組んだ」等の設問に5段階で自己評価をするものが多いです。この場合、「私は責任感のあるほうだ」に対して「ない」とつけるより「ある」とつけた方が良いということは誰にでもわかり、多少なりすましができてしまいます。そこで、なりすましができないように評価するにはどうしたら良いかということで、PROGでは両側選択形式(図2)を採用し

ています。例えば「A: 初対面の人と話すときでも、相手と距離をおかず親しく接する」「B: 初対面の人と話すときには、距離をとって礼儀正しく接する」では、学生は一見ただけでは正解がわからず、今までの自分の経験、活動を振り返って回答することになります。では、何をもって正解とするかについては、30代前半までに役職に就いているような、社会で活躍する若手ビジネスパーソンと学生の回答を比較し、統計的に違いがある設問を選んで、より社会人に近い回答をした人が得点される構造にしました。つまり、PROGのコンピテンシーが高いというのは、ビジネスマンに近いということです。2012年からの試行で、内定者と未内定者でスコアを比較したところ、内定者の方がコンピテンシーが高く、また、いわゆる人気企業(規模が800名以上の金融、大手関連等)の内定者と、人気企業の未内定者で検証したところ、内定者の方がコンピテンシーが高いという結果が出ました。このような試行を踏まえて、尺度として妥当だと考えています。

**PROGの有効性 【参考】リテラシーの測定(問題例)**

**①情報収集力**

**テスト項目**

- 1) 情報検索 情報源の特性/目的に応じた情報検索の方法など
- 2) 情報の整理・保存 情報を適正かつ効果的に活用するための方法など
- 3) アンケート・インタビュー(一次情報の収集) 目的に応じたアンケート・インタビューの方法など

**問題のサンプル**

下のA~Fの見出しのついた記事を、「芸能」「スポーツ」「経済」「外交」の4項目に分類した場合、最も不適切な分類の組み合わせを、次の①~⑤から選んでください。

A.「広がる最新通信機器」	① A「経済」 F「経済」
B.「あの日本が誇るアイドルユニット中国へ」	② C「スポーツ」 D「外交」
C.「凱旋帰国ジャパンサッカー バラエティー番組でもモテモテ」	③ E「外交」 F「経済」
D.「イチロー 難民に寄付」	④ B「外交」 E「経済」
E.「新薬安価で製造へ」	⑤ B「経済」 F「外交」
F.「ODAでまた癒着発覚」	

(図1)リテラシーの問題例

**PROGの有効性 ③企業社会(問題例)**

**両側選択形式**

連番	A	B
1	初対面の人と話すときでも、相手と距離をおかず親しく接する	初対面の人と話すときには、距離をとって礼儀正しく接する
2	人に接するときは、壁をつくらず本音で会話する	人に接するときには、礼儀を大切に丁寧で話す
3	感情に流されず、客観的な状況を分析して判断を下してきた	客観的な情報よりも、人の気持ちや人間関係に配慮して判断を下してきた
4	チームでものごとに取り組むときには、自分から率先して行動してきた	チームで物事に取り組むときには、周りに合わせて行動してきた
5	多少失礼だと思われても、相手の懐に飛び込んでいく	失礼のないように、慎重に言葉を選んで話す
6	おせっかいだと思われても、周りにいろいろと気を回す	相手の自尊心を傷つけないように、必要以上に余計な世話は焼かない

(図2)コンピテンシーの問題例

※図1、2 2014年度第2回教育支援センターFD研修会 講演資料より

## ■東海大学での試行結果及び全国のスコアとの比較

PROGテストは、2012年4月～2014年4月までの間に、4年制大学の学部生、大学院生101,389名、日本の大学の約2割にあたる166校で実施しました。設置主体では私立が77.7%、男女では男性が58.8%、学年では1年生が62.9%で少し多いという構成です。これらの(株)リアセックが所有する全国のスコアと、東海大学で試行した学生のスコアを様々な角度から比較した結果を紹介します。

### ■チャレンジセンターの試行結果の紹介

#### 対象:

【主観測定シート】+【個別面談】 実施者 52名

【主観測定シート】+【個別面談】 未実施者 54名  
(2014年1月受験)

●「集い力」、「挑み力」、「成し遂げる力」に関しては、【主観測定シート】+【個別面談】実施者の方が値が高い。ただ、「自ら考える力」に関しては、未実施者の方が若干上回っている。

●定期的に自分の能力を意識しながら取り組んでいた効果の可能性はある。今後、プレ・ポストで測定することで今回の取り組みが影響しているのかについての検証が期待される。

#### 【主観測定シート】+【個別面談】とは…

年間3回、主観測定シートによる能力測定と個別面談を行い、測定結果への振り返りと育成のための行動計画を作成(PDCAサイクル)する。

#### 対象:

4プロジェクト(ライトパワー、病院ボランティア、キャンパスストリート、環境キャラバン)の参加学生 40名

(2014年1月、7月 プレ・ポスト受験)

#### 目的:

チャレンジセンターで年間を通して行われるプロジェクト活動が、どの程度効果があったかを基礎力(ジェネリックスキル)の側面から客観的に測定し、効果検証を行う。

●「自ら考える力」、「集い力」、「成し遂げる力」に関しては、概ね初回受験と比較すると2回目受験の方が上回っているが、「挑み力」に関しては、ほぼ同水準となっている。プロジェクト学習を進める過程で、メンバー内で切磋琢磨し達成に向けて動いている様子が伺える。ただ、問題の原因を深く追求し、ゴールまでのシナリオを描く事に関しては、課題が残る。

## ■政治経済学部の試行結果との比較

#### 対象:

1年生 427名(2013年10月受験)

●比較集団の私立文系1年と比べると、リテラシーは若干下回っているが、コンピテンシーに関しては上回っている。

●要素別に見ると、リテラシーは、非言語処理力以外の要素が、比較集団の私立文系を若干下回っている。ただ、コンピテンシーに関しては、対人基礎力・對自己基礎力・対課題基礎力共に、比較集団の私立文系を上回っている。

### 取り組みの紹介

政治経済学部 現代文明論2 再履修クラス(2014年度)において、  
(株)リアセックが「問題解決演習」を実施

15回の授業全てが問題解決のプロセスに沿った演習で、前半は問題解決のための手順を理解するために「型」を学び、後半はどう実践するか、学びを「試す」。この授業では、情報を集め、原因を探求し、適切な課題解決策を作る一連の流れを考える。

前半: ケーススタディ 学園祭出店



プレゼンテーション

学生達は、プレゼンテーション評価の場で、教員から大変厳しいコメントをもらい、そこで初めてスイッチが入り、後半の学びを試すケースに向かっていく。

後半: ケーススタディ オープンキャンパス改善



プレゼンテーション

学生達は前回の失敗を踏まえて、より精度の高いプレゼンテーションを行う。最終的には、「4つの力」のルーブリック型チェックシートを用いて自己評価をする。

## ■文学部の試行結果との比較

### 対象:

2年生 56名、3年生 16名(2013年5月受験)

●比較集団の私立文系2、3年と比べると、リテラシーは若干下回っているが、コンピテンシーは上回っている。リテラシー・コンピテンシーともに、2年生より3年生の方が上回っている。

●2年生の小分類別で見ると、課題発見力を構成している4要素の中で、本質理解の水準が他要素より若干下回っている。事実に基づいて客観的に分析し、本質的な問題を見極めることへの苦手意識が伺える。

●3年生のコンピテンシーは、比較集団の私立文系を大きく上回っている。要素別に見ると、特に実践力の高さが目立つ。

## ■熊本校舎 阿蘇校舎 の試行結果との比較

### 対象(熊本校舎):

3年生 72名(2014年9月受験)

### 対象(阿蘇校舎):

3年生 212名(2014年9月受験)

●比較集団の私立文系・理系3年と比べると、阿蘇校舎のリテラシーの高さが目立つ。ただ、コンピテンシーに関しては、熊本校舎が上回っている。

●要素別に見ると、阿蘇校舎は、情報分析力以外のリテラシーの高さが目立つが、コンピテンシーの対人基礎力、對自己基礎力が下回っている。熊本校舎は、リテラシーの情報分析力・課題発見力の低さが見られるが、コンピテンシーに関しては、概ね比較集団の私立文系・理系3年を上回っている。

## ■人材ニーズ調査結果より

COC採択に伴い、人材ニーズ調査として、「4つの力」と各地域での求められる能力との関係について調査しました。卒業生が在籍、または、求人票を頂戴した5つの地域(北海道、東京都、神奈川県、静岡県、熊本県)の企業に調査票を1,750件(各地域350件)配布し、最終回収数は223件でした。結果として、「4つの力」で最も企業ニーズが高いのは、「大変強く求めている」という回答が一番多く、「求めてない」という回答が少なかった「集い力」であるということがわかりました。また、卒業生の能力に対する満足度は、企業から一番求められている「集い力」については評価されていますが、「挑み力」については、「優れている」という回答が一番少なく、「どちらかという物足りなさを感じる」という回答が一番多くありました。もちろん、企業が回答する東海大学生の評価というのは、自社にいる社員のことがほとんどとなるため、それをもって東海大学生の能力とは言い切れない部分もありますが、問題発見、構想力、プランニング、実際に主体的に動いて目標設定をするという能力について、少し物足りなさを感じるという回答でした。

## ■まとめ

学士課程におけるジェネリックスキルの育成が今後の教学改革の重点要素の一つであるということは、冒頭にお話した通りです。ジェネリックスキルの測ることそのものがPROGの目的ではありません。ジェネリックスキルをどのように伸ばしていくかという取り組みや学生との関わりの方が重要であると思います。

試行段階では、文理の差はあるものの、東海大学生はコンピテンシーが高い反面、リテラシーは低いということがいえます。みんなで集まって力を合わせる能力は高いと思いますが、一方、知識を使いながら問題を構造的に捉えることや、本質を考えていくことがもう少しできると良いと思います。そして、企業評価も同じで、コミュニケーション力、関係構築力がとても評価されています。いずれにしても、東海大学での試行はごく一部ですので、これだけをもって語れるものではありませんし、また、PROGは一つの尺度でしかありません。学生の様子をミニッツペーパーや出欠、課題、提出物等で多面的に把握した上で、学生の課題に応じた実践教育、特に地域と関わり、その地域の中で起こる問題を一緒に解決していくことを通して、学生の能力開発ができれば良いと思います。



■2014年度第2回教育支援センターFD研修会

# 地域活動におけるジェネリックスキルの養成について

眞鍋和博 教授(北九州市立大学 地域創生学群長、地域共生教育センター長)

2014年度第3回教育支援センターFD研修会(2014年12月8日開催)より

私達の取り組みはとても変わっていますので、これが本当に大学なのかと揶揄されることもあります。様々なところから評価をいただいています。何より学生達が非常に成長し、教育に満足してくれていますので、これからも強力に推進していこうと思っています。



眞鍋和博 教授

## ■地域の課題の解決に向けて

北九州市は、九州で最初に政令指定都市になりました。ピーク時には約106万人の人口が、今は約96万人です。市内の人口の多くは製鉄関連だといわれた時期もありましたが、これがかなり縮小されていることも影響し、人口の減少という大きな課題があります。また、政令指定都市の中で一番高齢化率が高く、過疎や安全安心の課題もあります。その他にもたくさん問題はあります。

平成21年度に北九州市立大学は地域創生学群を立ち上げました。すると、他学部の学生からも地域貢献をしたい、プロジェクトをやりたいという声が多くあり、翌年に地域共生教育センターを設置しました。非常に多くの学生がここで活動しています。更に、北九州市には多くの課題があることを踏まえ他大学との連携を考えていたところ、市の要望とも合致したため、文部科学省平成24年度大学間連携協働教育推進事業の採択を受け、北九州まなびとESDステーションを設置しました。北九州市の全大学が連携し、持続可能な

社会作りに対して実践的に活動しています。この活動は2年目で非常に盛り上がっています。

今、北九州では、地域課題の解決を目指し、学生達が地域に飛び込み、地域の方々と一緒に解決に向けて日々活動することが相当広がってきています。現在、私が見ているプロジェクトはおおよそ60あり、約1,000名の学生が常時、地域で様々な活動をしています。

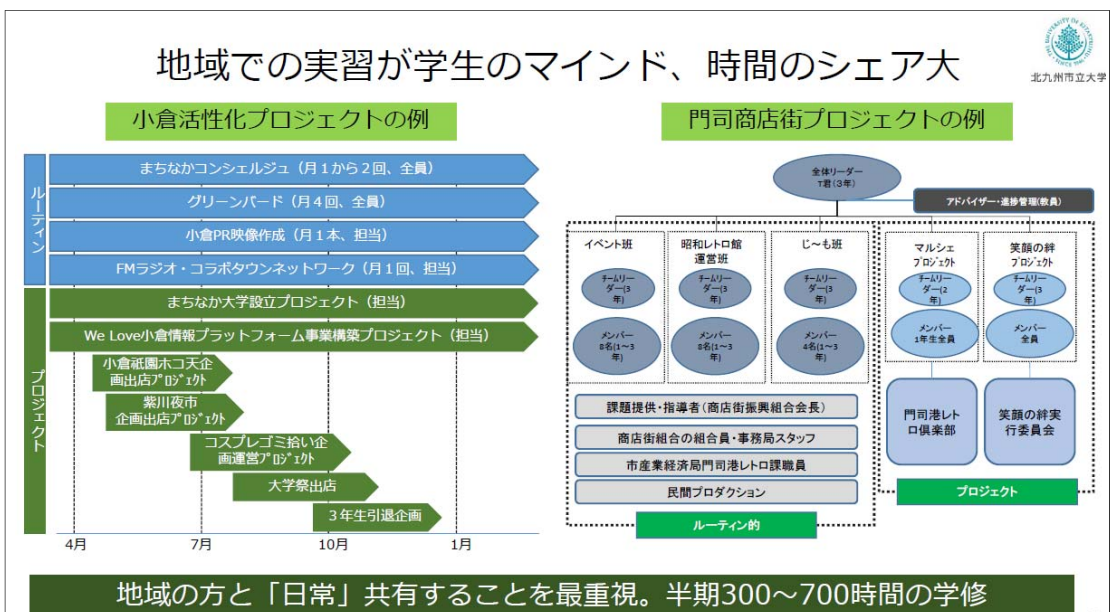
## ■地域創生学群について

地域創生学群には3コースあります。また、夜間特別枠もあり、1学年90名の定員のうち、40名は社会人特別選抜の定員です。しかし、実際には、社会人の入学は毎年10名程度に留まり、実質は9割が18歳の学生となります。夜間特別枠については難しい問題がありますので、次期中期計画で見直していきたいと考えています。

## ■地域創生学群の5つの特徴

### ■1. 地域での実習が学生のマインド、時間のシェア大

小倉活性化プロジェクトでは、小倉の中心市街地の商店街で、週1、月1回等のペースのルーティン活動をしています。例えば、北九州の名産品の被り物をして来街者の道案内をする活動や、ゴミを拾うグリーンバードの活動、映像を撮影する活動、学生自らが取材し放送するラジオ番組等があります。このようなルーティン活動をやりながら、色々なプロジェクト活動を同時平行しています(図1)。なぜこのようにしているかという、学群を作る際に、市立大学として地域貢献を推進したいという思いから、北九州の地域の方に話を聞きました。すると、アンケートをとるだけ、予算が付いている時だけ活動する、地域の人が本当に困っている日々の課題ではなく、先生の専門や学生のやりたい活動だけをしている、等々の指摘を受けました。このことにより、私は、大学の教育、地域貢献とは何かということを深く考えさせられました。そして、市立大学として本気で取り組み、教員と学生が地域の日常にどれだけ入っていけるかがポイントであると考えました。特別なことをしなくてもまず日常を地域の方と共にし、地域の方が困っていることを手伝う中で、半歩



(図1) 地域での実習が学生のマインド、時間のシェア大

先の学術的なことや新しいことを地域の方と一緒にやってみて、そして、地域の方ができるようになるということが、本当の地域貢献ではないかと思い活動しています。ですから、地域の方と日常を共有することを重視し、各プロジェクトは、ルーティン活動とプロジェクト活動を同時平行しています。

小倉活性化プロジェクトは、各学年7、8名の学生で構成されています。たくさんルーティン活動とプロジェクト活動があるため、3年生はいずれかの活動のリーダーとして関わりますが、2年生や1年生でもリーダーをやることもあります。他のプロジェクトでも、複数のチームがルーティン活動、プロジェクト活動を同時に動かしています。そして、このようなスタイルが学生の成長に非常に良いということがわかってきました。あるプロジェクト活動ではリーダーをし、別のプロジェクト活動ではフォロワーとして動き、あれはルーティン活動で、これはプロジェクト活動だ、というマルチタスクを学生は自分達で時間を上手く調整しながら動いています。学生にヒアリングすると、現場での活動、大学内でのミーティング、家で企画書を作成する、本を読んで事例を調べる、それらを全部含めて、半期で300～700時間学修していることがわかりました。仕掛けは教員がしていますが、地域と自分の成長のために、学生はこれだけの時間を割くようになってきました。非常に大きな成果だと思います。また、教員が関わり過ぎると学生の主体性が薄れてしまうため、加減が難しいところではありますが、いい具合に放ったらかすということを教員は意識しています。

## ■ 2. ポートフォリオ、アセスメント、各種研修の導入

学生を成長させるための触媒を随所に組み込んでいます。PDCAを学生が自分達でまわせるように、ポートフォリオで自分の「地域創生力」がどのくらいのレベルにあるのか、どのように伸ばしていくかということセルフマネジメントさせています。更に、チームビルディングや学生の成長につながる研修も行っています。「地域創生力」は、コミュニケーション力、チームワーク・リーダーシップ、課題発見力、計画遂行力、自己管理能力、市民力の6つで構成され、これは、社会人基礎力、学士力、OECDのキー・コンピテンシー等の尺度を整理して、地域の方に意見を伺いながら設定しました。「地域創生力」を伸ばすために、ルーブリック(レベル1～5)を学生に提示し、また、年に1回、振り返る機会も設けています。

## ■ 3. マナーの徹底

図2は、地域創生学群生として心得てほしい事として、新入生に私から話をしています。まず、服装、髪の色はきっちり指導します。(三)の基準は自分の中にないということです。学生は入学式の翌週から地域に出るため、自分が良いと思っても、地域の方が駄目だと思ったら、駄目が正解だということを徹底的に教えます。また、遅刻についても同様に徹底的に指導します。新入生全員が履修する「地域創生基礎演習A」は、敢えて1時限目に設定しています。3回目の遅刻に対しては、遅刻を詫言する必要がある人それぞれに宛てた400字詰め原稿用紙10枚の手書き反省文を1週間で書かせ

ます。誰に迷惑をかけたのかを考えさせながら厳しく指導します。その他、(一)挨拶。(二)地域に入って一緒に活動することで学ばせていただいているという謙虚な姿勢を忘れてはいけないということ。(四)1年生は地道に同じことをやり続けて退屈かもしれないが、それをやらないと次の段階にはいけない、つまり、守に当たるルーティンワークを重視するという。(五)自分が成長する機会を自分で創り出すということ。これは、2年生になったら意識して欲しいと強く言っています。(六)来た時よりも美しく。これは、常に他者の存在を意識して、自分達で動くということです。そして、(七)感謝するという。

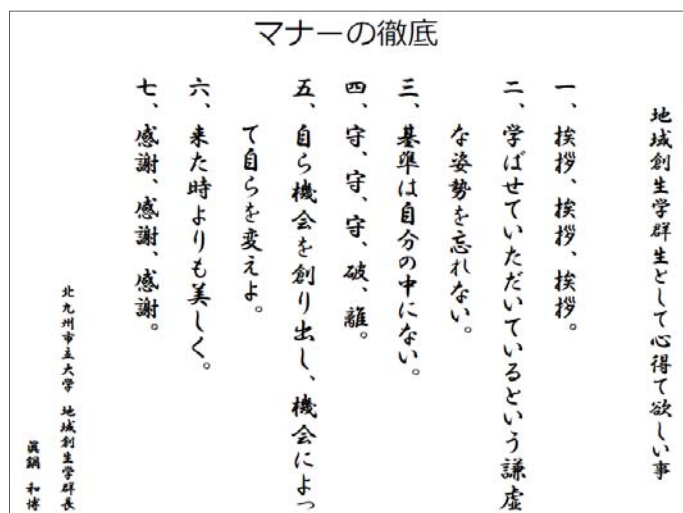
高校のようですが、地域創生学群では学生を地域で活動させるため、マナーは徹底して指導しています。

## ■ 4. 学生と教員の距離が非常に近い

規模が小さいこともあり、日常的に学生と一緒にいることが多いです。学生の指導については、2名もしくは3名の教員で見ることができる体制をとっています。教員は、学生個人の課題とポイントがわかるため、きめ細かい教育ができていると思います。また、スタッフの採用を重視し、コーディネーターや、地域で活動をした経験がある人を特任教員として迎え入れ、直接学生を見てもらいます。その予算を獲得するためにGP等の補助金を積極的に申請し、外部の人材も大学の中に巻き込み、一緒に活動することを意識しています。

## ■ 5. エンロールメントマネジメントを重視

私達はどんな学生を入学させるのかということにこだわりを持っています。入試にはAO選抜と一般選抜がありますが、面接を重視し、面接で差がつくように配点をしています。面接では、7～8名の受験生を1つのグループにして、グループディスカッションを行います。積極性がある人や、変な方向に行きそうになったら軌道修正できる人、全く発言していない人がいると話を振れる人等、教員は対策できないようなことを色々と見ています。志願倍率はこれまで10倍前後で推移していますので、グループの中で1名合格するかしないか



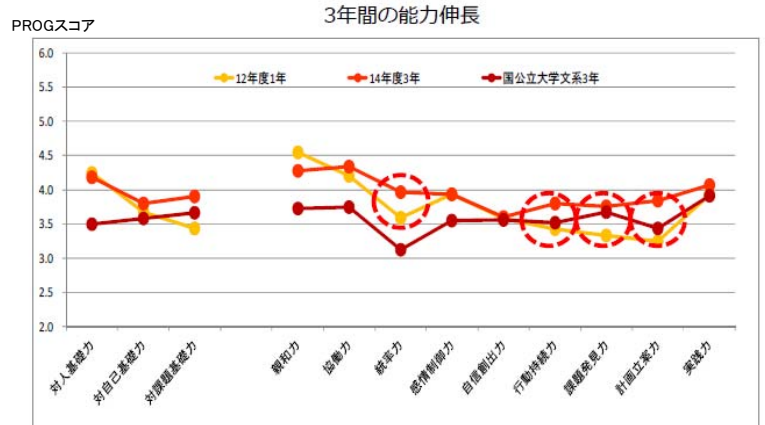
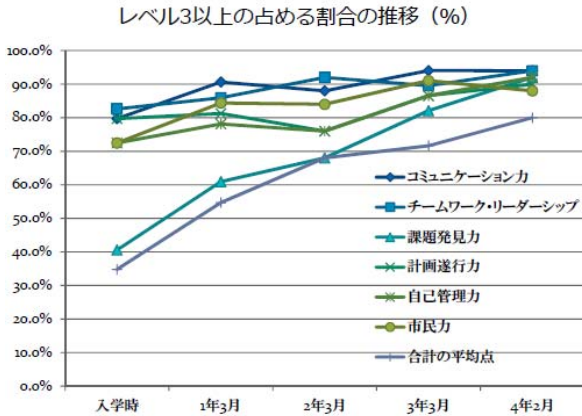
(図2) マナーの徹底

※図1、2 2014年度第3回教育支援センターFD研修会 講演資料より

## 汎用的能力の獲得

### 地域創生力アセスメント

### PROG



(図3) 汎用的能力の獲得 ※2014年度第3回教育支援センターFD研修会 講演資料より

ということになり、入学者はコミュニケーション能力が高い学生が多いです。一般選抜では、取得した資格やスポーツ、活動等の実績も得点換算します。

地域創生学群では、ある程度コミュニケーション能力や主体性があり、周りにも配慮ができて、地域に対する問題意識、自分を成長させたいというドライブを持った学生でなければ、周囲はそういう学生ばかりなのでついていけなくなってしまいます。不適応を起こさせないためにも、なるべく見極めて入学させるようにしていますが、実際には、わずかですが、休学者や退学者がいます。学生との距離が近いと、自分に合っていないなら早目に決断した方が良いでしょうと伝えています。休学や退学に至らないまでも、やる気が出ない学生もいるため、その場合は、学生の属するチームのリーダーと一緒に対策を考えています。

### ■成果について

#### ■汎用的能力の獲得

地域創生力アセスメントとは、先程紹介したルーブリックです。年に1回(1年生は入学時と年度末の2回)測定し、図3左表は、レベル3以上の占める割合の推移を表しています。自己採点の心理尺度ですが、多くの学生が成長実感を持っていることが見て取れると思います。

図3右表は、2012年度(1年生)と2014年度(3年生)に実施した「PROG」の結果です。3年間の能力伸長を表しています。下がっている尺度もありますが、統率力、行動持続力、課題発見力、計画立案力は上がっています。国公立大学文系の平均に比べても少し高い値を示しています。

また、成長のトリガー調査として、第1期生19名に成長したと思うきっかけについてインタビューしたところ、仲間、地域の方を含めた集団、子供や高齢者等多様な人との活動、教員との接点、没頭したこと等、色々な要素が出てきました。今後、学術的に分析をしたいと思います。

#### ■就職

第1、第2期生ともに就職決定率は100%でした。就職先としては地元の中堅企業が多く、業種は様々です。学群を作る際に話を聞いた高校からは、就職先がわからないと生徒は進学を希望しないと言われましたが、私は、就職先を意識するのではなく、どの業種のどんな仕事でも通用する学生を育てたいと思っていました。結果的には、ほぼその通りになったと思います。また、学群では北九州市出身の学生は約15~20%ですが、それよりも多い約25~30%が北九州市内に就職します。地域活動に主体的な学生ほど、1~3年生で地域や企業の方と一緒に仕事をする中で培った人脈ができた、職業観が醸成されていくようで、就職したいと思ったところに就職していきます。私は、これが今後の大学の就職のあり方を示していると思います。就職活動、新卒の就職という概念を再構築する時期なのかも知れないと思い、今後問うていきたい部分です。

一つ課題なのは、公務員試験対策です。しかし、最近は民間企業と同じような就職活動で公務員になることができる自治体も増えています。北九州市にもそのような特別枠が設けられています。

#### ■入試・広報

入試については、2年目の一般選抜は24.2倍と国公立の中では日本で一番の志願倍率でした。そして、それ以上に私が嬉しいのは、入学率が高く、ほとんど辞退がないということです。また、当初はセンター試験2科目で面接重視ということから、勉強は好きではないがコミュニケーション能力や行動力があるという志願者が多かったのですが、ここ2、3年は、高偏差値の高校から志願してくるようになりました。

地域創生学群の広報は、「地域創生学群広報実習」として学生が行います。パンフレット作成のみならず、学生が自らアポイントメントを取り高校訪問も行っています。また、最近では、高大連携の話が持ち込まれてくることも増えてき



ました。ある公立高校から学生に直接、コミュニケーションの活発化を目的としたワークショップ開催の依頼がありました。このようなことがあると学生は本気になり、あまり勉強をしておかなかった学生でも、心理学や教育学の本を読んでワークショップをつくっていきます。これこそ、本当の主体的な学習ではないかと思っています。

### ■学生満足度と校風(学群風)の醸成

卒業式の日「学生生活は充実していましたか?」「この学部学科に入学して良かったと思いますか?」というようなアンケートを全学的に実施しています。地域創生学群は、遅刻等に対する厳しい指導や実習にもかなりの時間をかけているため、苦勞した学生生活を過ごした学生もいると思いますが、アンケートでは「充実していた」と回答してくれています。また、主体的に動くこと、自分が何か社会の役に立ちたいと思うこと、マナーや人に見られているという意識も定着し、教員が言わなくても先輩が後輩を指導しています。地域創生学群の学群風ができてきたと思います。

### ■地域の活性化、シビックプライド醸成

今までは、大学生は地域の担い手ではありませんでした。学生は地域に住んでいても、地域のことは何も知らないし、行事にも参加しないというのが普通であると思います。ところが、地域創生学群の学生は、正式に地域から依頼を受け、色々な役割を担っています。そして、学生も地域の担い手になるということがわかってきました。一生懸命に活動することで色々な人と繋がりができ、成功や失敗の経験の中で、地域のことが好きになり、地域のために活動する学生が増えていると思います。先程の北九州市内への就職率が高いというのはまさにこういうことです。また、今後は、学生が自分の地元で同じような活動を展開することも起こってくるのではないかと思います。大学生は地域活性化のプレーヤーになることができると気づきました。

### ■地域共生教育センター、

#### 北九州まなびとESDステーション

学群以外の学生を対象とした地域共生教育センターは、文部科学省平成21年度GP採択により設置され、期間終了後も常設の組織として、約1,100名の学生登録、実働年間約500名が活動しています。必修の授業としてではなく、純粋にやりたいと思っている学生が集まるため、意欲も高く非常に楽しい活動の場です。地域共生教育センターを利用して色々な経験をしたいという学生は、海外留学等のために活動を1年間でやめてしまうことが多いです。私としてはもう少し続けてほしいという気持ちがありますが、学生の主体的な思いを大事にするため、年度が変わっても地域との関係性が切れないようにコーディネートしています。また、広報や学生募集、地域からの相談の第一段階目の対応等をする学生運営スタッフがいることが特徴です。加えて、地域共生教育センターは、平成26年度から立ち上げた「環境ESD副専攻」の

事務所管にもなっています。

北九州まなびとESDステーションは、冒頭で紹介したような経緯で設置されました。私は、地域や社会を持続させるために、地域の人と一緒に活動すること自体がESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)だと理解しています。まさに地域創生学群と地域共生教育センターの活動そのものです。ESDという耳慣れない言葉が日常的に地域の方の目に触れ、なんだろうと思ってもらえるように、敢えて家賃は高いですが商店街の空き店舗をキャンパスにしました。その結果、生涯学習の拠点として、市民も多く訪れ、平成25年度は13,000名以上が来場しています。現在では、学生500名、市民400名程が登録をしており、学生だけでなく、北九州市民にシビックプライドを持ってもらう、市民を巻き込んだ地域の課題解決活動が始まっています。

### ■今後の課題

学生の実践的なプロジェクトに対する教員の教育的な関与が大きくならざるを得ず、各教員の特徴が出るためプログラムとして汎用化できないというジレンマと、教育に時間がかかるという課題があります。また、地域から非常にたくさんの相談をいただきますが、学生に負荷をかけ過ぎることはできません。しかし、相談に対して改善につなげるような提案を返さず何もしないのは本当の地域貢献ではないと思いますので、これをどうするかというのは非常に難しい課題です。

評価については、何をもって評価するかというのがとても難しいです。文部科学省平成26年度大学教育再生加速プログラムにも採択されたため、心理尺度に加えて、企業のマネージャー研修等に用いる360度評価の一種を導入し、多面的に学生の成長を評価する仕組みを検討しています。また、学生が地域で活動することで地域側はどう変化したのか、どれだけ地域が活性化したのかを測定する地域活性化指標を3~5年で開発したいと考えています。

地域創生学群は通常、3年生の終わりまで実習を行います。地域創生学群チャレンジプログラムでは、実習は2年生までとし、3年生からは、長期インターンシップもしくは、起業することになります。現在は、テストケースとして2名が長期インターンシップ、1名がNPO法人の設立をにらんで活動しています。来年度から本格導入されるこのプログラムを推進していきたいと思っています。

最後に、地域創生学群で行っている教育は、大学教育として認められにくく、なかなか理解をしていただけません。他学部、他大学の先生や学生達を巻き込み、理解していただくにはどうしたら良いかを日々悩んでいるところですが、おかげさまで、学生は一生懸命に活動し、充実した日々を送っていますので、私はこのような活動が新しい大学教育に位置付けられることも必要なのではないかと思っています。

# PA型教育導入に向けて～PAとは何か～

2014年度第4回教育支援センターFD研修会(2015年1月22日開催)より

Public Achievement(以下、PA)とは・・・

若者が社会活動を通して民主社会における市民性を獲得していく実践であり、そのための組織と学習プログラムです。

## ■PA型教育導入について

梶井龍太郎 学長補佐(To-Collabo担当)



全学で既に実施している教育活動を基にするのが前提の大学COC事業への応募は、本学のような全国型の大学には難しいであろうと言われておりましたが、全国型の大学では本学のみが採択されました。応募にあたっては、地域貢献プログラムでもあることを踏まえ、地域の課題に向き合い、自治体と一緒に何をするかを考える必要もありました。スポーツ教育等の様々な案の中から、全ての校舎で活発に行われ、社会貢献、地域貢献活動も含むチャレンジセンターのプロジェクト

活動を基にすることになり、「地域」と、本学の教育活動である「東海大学型リベラルアーツ教育」、「文理融合」、「4つの力」をあわせて考えました。そして、チャレンジセンターのアクティブラーニング、PBLの発展形でもあり、シチズンシップを身に付けることのできるPAに辿り着いたのです。教育の流れはいくつかに集約される傾向があり、PAは元を辿るとデンマークの国民高等学校の教育で、本学と流れが一致します。なお、PAはあくまでもアメリカの教育体系であるため、そのまま導入するのではなく、本学ではPA型教育という形で考えています。

PA型教育は、全く新しいものというよりは、今までやってきた教育を現代版にしたものです。必修科目については、関係部署にて検討を重ねていますので、まもなくひな形が提示できると思います。また、今回派遣された研修団の報告に基づく資料を作成し、研修内容を全学に周知していきたいと考えています。

PA型教育は、全く新しいものというよりは、今までやってきた教育を現代版にしたものです。必修科目については、関係部署にて検討を重ねていますので、まもなくひな形が提示できると思います。また、今回派遣された研修団の報告に基づく資料を作成し、研修内容を全学に周知していきたいと考えています。

## ■研修(視察)から見たPA はじめに

内山秀一 教学部次長

PA教育の第一人者である Augsburg CollegeのBoyte氏から「君達の創立者の信念と僕らがやっていることは、源流は同じだ」という言葉がありました。本学でPA型教育を導入することは、学生に対してより良い教育を提供するための一策であると感じました。



を聞き出す手法等のヒントを得ることができました。

一方、本学のチャレンジセンター中間報告会での学生達の様子は、非常に明るく積極的です。その様子から、学生達が、チャレンジセンターの活動を通じて、社会に出て行く術を身につけていることに合わせて、本学においては、既にPAのモデルがあるとも言えます。

このように、本学におけるPA型教育は、全く新しいものを導入するというよりは、今までやってきたことをベースにしていけばよいのではないかと思います。世界的にも、PA関連科目を必修科目に位置づけている大学はありません。東海大学は、先陣を切って全学的なPA型教育に挑むことになります。いくつかの問題も生じるとは思いますが、前向きに進めていきたいと思っています。

## 研修団 メンバー紹介

内山秀一(体育学部教授、教学部次長)  
山本義郎(理学部教授、教育支援センター次長)  
堀本麻由子(チャレンジセンター講師)  
鹿田光一(熊本教養教育センター副主任、准教授)  
植田 俊(国際文化学部地域創造学科助教)  
緒方道郎(教育支援センター教育支援課課長)  
守屋智美(湘南教務課)  
永禮明子(To-Collabo推進室)

今回の研修では、PAに関する多くのことを学び、経験させていただきました。特に、地域の問題についてディスカッションする場である「タウンホールミーティング」では、学生も自分の意見をはっきりと述べていました。学生が積極的に社会に関わり、地域住民とともに社会を変えていこうとする姿勢を持っていることを、非常に強く感じました。おそらく、松前重義先生もデンマークの国民高等学校のそのような様子を見て、教育について考えたのではないかと思います。また、PAにはアクティブラーニングやPBLと似た部分があり、学生の意見

## 今回の研修で訪れたPAに取り組む大学の概要

### ■Augsburg College (Minneapolis, Minnesota)

1880年代に設立されたキリスト教系大学。

学部: 50専攻、学生数 約4,000人。

教育目標: 地域に根ざした実践教育によってグローバル・地域の課題解決に対して主体的に行動できる市民を育成する。

### ■UMBC (The University of Maryland, Baltimore County)

1960年代に設立されたメリーランド州立大学の分校。

学部: 54専攻、学生数: 約14,000人(学部: 11,400人、大学院: 約2,600人)。

教育目標: 教育、研究、社会貢献を通じ、公的な問題に対応できる人材を育成する。

2大学とも、地域と連携して、社会的な問題の解決に向けた学生の主体的な行動を後押ししています。

## ■PAとは何か 堀本麻由子 チャレンジセンター講師

私は、昨年度もPAとは何かを確認する視察に行きましたが、今回は学生に対してどのようにPAが行われているのかを確認する非常に有意義な研修となりました。私からは、PAの基本とAugsburg CollegeとUMBCの事例を交えながらアメリカのPAについて説明します。



**【歴史的背景】**Augsburg CollegeのHarry Boyte氏がPAの創始者です。1960年代に公民権運動に関わり、その経験をPAに継承されています。1986年にミネソタ大学ハンフリー公共政策センターに、Center for Democracy and Citizenshipが設置（現在は、Augsburg Collegeに移管）され、1990年からPAを開始しました。若者の市民性育成モデルとして、広く認識されるようになり、現在はアメリカをはじめ15カ国以上で展開されています。

**【PAとは何か】**昨年度、本学で講演をしていただいたAugsburg CollegeのDonovan氏は、「PAを通して、あらゆる年代の人々が他者と協同で問題解決にチャレンジすること」、「人々はCitizenship（市民性）とDemocracyの意味をお互いから学習する」つまり、普通の人々が驚くようなことができるという経験をサポートしていくものだとおっしゃっています。

### ➤Augsburg Collegeの事例

実際にAugsburg Collegeで行われているものは、チームに分かれて、小中高の児童、生徒が大学生、大学院生のコーチと一緒に自己関心に基づく公的な課題解決に取り組む経験を通して、市民性を育てていく方法です。特徴としては、児童、生徒、学生主導で活動を進めるということです。何をやるのか、どうやるのかを全て児童や学生が選択して決めます。今までのボランティアやサービスマーケティングとの違いは、慈善活動だけに留まらず、課題の解決に関わって多様な活動を行うことができる点です。チーム活動が基本のPAのミーティングではファシリテーター、記録者、タイムキーパー、評価者、励まし係等の役割を分担し、チームが自治の基盤になるということを児童、生徒、学生と一緒に経験していきます。

活動の流れとしては、最初に 이슈の選定を行います。公的な課題として何に取り組むかを決めますが、これがとても重要です。一人ひとりの関心を大切に何をしたのかたくさんアイデアを出し、自分達で決めていきます。一般的なプロジェクトと違うのは、課題を先生や大人が決めるのではなく、児童、生徒、学生が決めていくことです。そして、PA活動を展開させる6ステップ「1. 導入：自己紹介、ルール作り」「2. 이슈の掘り下げ」「3. 問題の調査：イシューに関わってどのような問題があるのか探求し、その問題について本、新聞、インタビュー等で具体的な調査を行う」「4. プロジェクトの

計画」「5. プロジェクトの実行」「6. 振り返り・成果発表」が行われます。これまでに行われたプロジェクトのイシューを紹介します（図1）。大きく分けると、「発信・啓発」、「影響・変革」、「創造・構築」、「奉仕」の4タイプに分類できます。一見たわいもないことですが、1年をかけて解決するとなると色々な力が必要なこともあり、大学生もコーチをしていくのは大変だと思います。

タイプ	過去に行われたプロジェクトの例
①inform/educate (発信・啓発)	・パンフレットを作る ・本を書く ・ビデオを作る ・集会を企画する ・プレゼンテーション
②influence/change (影響・変革)	・議員やロビイストと協働する ・市民権テストを変える ・学校のマスコットを変える
③create/build (創造・構築)	・リサイクル用のゴミ箱の設置に取り組み ・地域庭園を作る ・遊び場を作る ・無料歯科検診が受診できるようにする
④service (奉仕)	・公園を掃除する ・食品整理の手伝いをする

（図1）PAで生れるプロジェクトの分類（古田、2014）

※2014年度第4回教育支援センターFD研修会 講演資料より

コーチは、Augsburg Collegeの学生の他に、近隣のUniversity of MinnesotaやCommunity Collegeの学生も務めています。期間中は週1回PAのコーチ活動を行うのと、終了後に振り返りをするのが一般的です。ファシリテーター（チームが民主的に活動を学ぶのを助ける）、プロジェクトマネージャー（プロジェクトを企画し実現するのを助ける）、経験学習プロセスを尊重する教育者（活動のプロセスからチームが学ぶのを助ける）がコーチの役割となります。また、大学教職員が務めるコーチコーディネーターはコーチを支援する役割をします。Augsburg College、University of Minnesota、Community CollegeでPA関連の選択授業が行われていて、そこから何人かコーチがスカウトされ、小中高のPAのプロジェクトのコーチ役をやるという形で循環し、支えています。PAでは、色々な人が関わってプロジェクトが行われます。若者が自分達で主体的に活動するのを周りの大人や地域の人々が支える関係です。

PAで大切にされている考え方を紹介します（図2）。

### ➤Augsburg Collegeのまとめ

小学生に何がPAで一番好きかを質問したところ、「自分で何でも決められるところ」と回答してくれました。自分達で決めて実行していくことで、やりがいを持つことができるのだと思います。日本ではアクティブラーニングが経験から学ぶ教育法として注目されていますが、PAの一人ひとりの関心をどのように大切にしていくかという手法は、参考になると思います。また、主役は若者という考え方が、教育をエンパワメントして、学校文化、大学の組織文化を変えていく起爆剤になると考えています。

### ➤UMBCの事例

UMBCでは、大学教育のシステムにPAがUMBCのやり方で導入されており、「PA型教育」が行われているということがわかりました。

## PAで大切にされている考え方

- ・子供や若者は「未来の市民」ではなく、「現在の市民」  
選挙権に関わりなく、児童、生徒、学生でも公的な問題を解決できる、現在の市民であるという考え方です。
- ・個人の関心 (self-interest) から出発する  
一人ひとりの思いを大切に、それをどう実践に結び付けていくかが、非常に丁寧に扱われています。
- ・フリー・スペース (free spaces)  
これは初期のアメリカの公民権運動等で重要視されたことで、参加している人達の自治で作られるということです。
- ・パワー (power)  
対立するのではなく、どんな人達がいて、どんな人と協力して問題を解決するのかを子供や学生に考えてもらい、協同で課題を解決する経験にあたります。
- ・多様性 (diversity) と政治 (politics)  
身近な政治を若者に経験してもらおうという考え方です。
- ・パブリック・ワーク (public work)  
市民自らの手による協同的な課題解決と社会創造について考えることです。

(図2) PAで大切にされる考え方 (古田, 2014)

アメリカではサービスマンシップが80年代位から盛んに行われていたため、地域連携にUMBCも取り組んでいましたが、2012年、米国教育省の高等教育改革を契機にパブリックワークアプローチとしてPAに着目しました。当時、メリーランド州には大企業の工場がありましたが、景気の悪化により一斉に撤退したため、過疎化という地域課題を抱えていました。地域課題に対して大学として取り組むため、主体的に行動できる市民性育成のための授業や教育活動を展開する目的でPAは導入されました。

縦割りの学部組織を連携させる機能として、学内横断のワーキンググループ(学生会、教員、SHRIVER Center: ボランティアセンターで構成)が中心的役割を担っています。ワーキンググループの事務局は、学生支援センターに所属している教職員が担当し、そして、地域と連携して活動しま

す。UMBCの授業、プロジェクト例としては、「ビジュアルアーツ学と広報メディア学の授業:PBL、パブリックワーク、異分野の教員による協同」、「学際コース(食糧システムの構築): PBL、地域の小学校との連携、学生個人の関心から始まる学生による起業」、「大学公式キャラクター周知プロジェクト: 学生個人の関心から始まる、パワーを活かした問題解決の経験」等があり、学生会も主体的に取り組んでいます。

### ➤UMBCのまとめ

市民性育成のためにPAで大切にされている考え方を授業やプロジェクトに取り入れていました。Augsburg Collegeのやり方をそのまま導入してはいないのですが、多様な人々との協同による経験学習をさせたり、慈善だけでなく課題解決を目指したり、異なる専門分野の教員が協同で地域課題プロジェクトと授業を構築して、教員に対するCivic Engagementの考え方の啓蒙や、大学が抱える課題に対して大学生が自分達で解決する自治の経験を促進していることがわかりました。

### ➤まとめ

若者が一人ひとりの関心に基づいて行動することで、地域・社会を変えうる経験を支援する教育思想・方法であって、大学の授業や組織システムを変えつつ、大学と地域連携を基盤とする教育活動でもあると感じました。現在、チャレンジセンターで行われている授業もそこを狙いとしている部分もあります。今回の研修で、学生の社会的効力感を育成していくことが非常に大事だと感じました。自分も社会に貢献できるということを経験を積み重ねるためには、非常に有効な教育活動なのではないかと考えています。そして、このような活動が学生主体の大学・地域連携モデルにもなりうると思いますので、今後の教育的取り組みの参考にさせていただきたいと考えています。

### ＜参考文献＞

古田雄一(2014年6月15日)『アメリカ「パブリック・アチーブメント」の実践—新たなシティズンシップ教育実践への模索—』(J-CEFクロストークvol.2「海外視察報告会」発表資料)。

## ■研修を受講して 山本義郎 教育支援センター次長

教育支援センター次長として、今後、PA型教育を推進するためには、どういう体制で行えば良いのかを見てきました。本日は感想を含めてお話いたします。

### ➤研修パート1 Augsburg College

**【1日目】**最初にPAについて説明を受けました。「民主シーをどのように達成していくのか、君達はその役割を担っている市民である」という考えは、アメリカの学生には合うかも知れないが、日本の学生にとっては難しいと感じました。しかし、その部分を除いては対話を重視するという点なので、基本的にはアクティブラーニングだと思いました。そして、本学の建学の精神と源流は同じだということで少し安心しました。説明を受けた後、タウンホールミーティングに参加しました。タウンホールミーティングは、定期的に行われ、取り組み内



容や問題になっていること等を話します。PAの活動をしているメンバーが自由に参加し、出入りも自由でした。PAにおいては、このような活動のできるフリースペースが重要だと感じました。

### **【2日目】**PAについてのレクチャーと実践(高等教育にお

ける教育方法: Public Narrative、Civic Agency、Self-Interest、Power、Public Relations)、「One to One」の方法の解説と実践を行いました。「Civic Agency」は、民主主義にあって市民としてどう行動するべきなのかということで、「Self-Interest」は、それぞれの抱えている問題や状況によって関心事は違うため、自分が今興味をもっていることを1対1で話

すこと、「Power」は、自分が持っている原動力や自分ができることという意味で、お互いに協力しながら問題解決にあたっていき、そのように私は理解しました。そして、「One to One」のインタビューを研修団のメンバー同士で実践し、何のためにここに来たのか等を話す経験を通して、内容についての理解が高まりました。また、学生が実際に「Public Narrative」で自分について語るパートを行っているところを見ることができたので紹介します(収録DVD:学内のみ貸し出し可能)。今までは、アメリカ人だから授業が成り立つと思う面もありましたが、そうではなくて、相当練習をして自分が語ることによって存在感や学ぶことに対する価値観を身に付けているということがわかりました。

**【3日目】**PAの実践の場であるMaxfield Elementary Schoolの視察をした後、大学におけるPA実践の現状と方法、その課題についての意見交換を行いました。PA活動は小グループに分かれて行われ、模造紙に考え方や問題解決に向けたアイデアを図示し、話し合っているグループがあれば、インターネットで調べ、携帯端末を使って遠隔地の方と対話しているグループもありました。同じ時間と場所を共有していても活動もやり方も様々で非常に面白かったです。決まり事はグループで時間内に活動することだけで、子供達にはアジェンダで示されています。まとめはコーチがしていますが、子供達が自由に活動していることがわかりました。また、別々に活動しながらも情報共有する仕組みが上手く考えられていました。

**【感想】**PAと本学の建学の精神の源流は同じであり、デンマークの国民高等学校に見られた社会の中で個人を育てていこうとする教育のあり方は、まさにPAにおける実践的な場面に相応しているという話を聞くことができ安心しました。また、PAの実践方法自体はアクティブラーニングの一種だと捉えると、気持ちが楽になりましたが、学生は問題提起をするだけでは動かないため、学生自身が問題意識を持つことと、それに対してどう動くのかをたきつける必要があります、その仕組みが整っていると感じました。

### ➤ 研修パート2 Georgetown University

地元の小学生を招いて学生が主体となり開催したイベントの視察と施設見学を行いました。その後に行われたGeorgetown University CSJヒアリングでは、本学のチャレンジセンターの活動と比較しながら話を聞きました。

**【感想】**単位認定の方法が工夫されていました。また、教員がやりたいと考えた科目ができる等の仕組みが整っていました。しかし、活動全般としては本学のチャレンジセンターの方が色々配慮されていると感じました。

### ➤ 研修パート3 UMBC

UMBCにおけるCivic Agencyへの歩み、Breaking Ground working groupを中心とした活動とその成果についての話を聞きました。また、大学院科目「Peace worker Seminar」に参加しました。Augsburg CollegeのPAは小学校等とタグを組んでいるため、どの学部でもできるものではないという印象が

ありましたが、UMBCでの取り組みは、本学のチャレンジセンターのプロジェクトのような例や、学部のプログラムに組み込んでいるという例もあり、かなり参考になりました。

**【感想】**工学部の学科主専攻科目として、大学の改善への取り組みプロジェクト等がフィールドワークを伴って実施され、成績優秀者のオナープログラムも含まれていました(通常は週1回2単位のところ、オナープログラムは通常の1回に加え週2、3回の授業を受けることで計5単位修得)。また、大学院の授業を訪問者に体験させることや、Civic Engagementを現地学生と共にいる留学生の受け入れプログラムが準備されているため、語学留学のみを目的としないこの種の留学プログラムへの本学からの派遣や同様の受け入れをすることも有用ではないかと思います。



### ➤ 全体のまとめ

PAはアクティブラーニングの発展形と捉えることができると思います。そして、PAでかなり意識されているのは、学生はどうすれば動くのかということです。PA型教育の位置づけは、「東海大学型リベラルアーツ教育を実現する取り組み」であり、自分の専門を地域社会に活かすヒントをいただきました。

本学では2017年度よりPA型教育として3つの必修科目ができますが、それ以外にも入門ゼミ等の初年次教育において、学生に自分のことを語らせるNarrativeにあたる部分を取り入れていくと効果的だと思います。これを大学全体で上手く活用すると、現代文明論が生きてきますし、今、社会で何が起きているのかについては当然知るべきことであるため、文理共通科目の理解を高める材料にはなるのではないかと思います。

また、学生が活動する場所作りがとても大事だと思いました。ちょっとしたスペースに椅子を置くヒントを得ることができましたし、サンドウィッチを食べながらのディスカッションに対応している図書館もあれば、禁止している図書館もある等、上手に使い分けられていると感じました。

### ➤ 今後の課題

チャレンジセンターが実施してきた「集い力」、「挑み力」、「成し遂げ力」の授業とPAの手法の融合による本学のPA型教育について、「ガイド」や「ワークシート」が整備される必要があると思います。また、学科の中でカリキュラムを作る際に、学生をどのように育てるのかについて、お互いに語って価値観の違いを共有するPAの手法を用いてみると良いと思います。そして、PA型教育が導入されることで地域の方から「学生が生き生きしている」という声をいただけるように、我々は何ができるのかを考えていかなければならないと思います。

## ■東海大学におけるPA型教育

平木隆之 課程資格教育センター静岡分室長  
海洋フロンティア教育センター長



以前から清水校舎の課程資格教育センターでは、授業支援、補習授業のサポートとして附属中学校、附属高校と関わってきました。今回、新たに授業支援の依頼が附属小学校からあり、この機会に、大学がこれから導入するPA型教育

を、教職課程を履修している学生がコーチとして参加する形で試行することにしました。

PA型教育の試行は、附属小学校3年生社会科授業にて、2014年9月～2015年3月に実施し、準備を含めると約1年をかけています。今回の試行での目標は以下の3つです。

- 【1】PAでコアになるパブリックワークを通じて、観光振興という地域社会の共通課題に児童と学生が主体的に関わる。**
- 【2】幼稚園から大学院まである清水校舎で、一貫教育に基づくPA教育の構築ができるかを探る。**
- 【3】教育成果を外部へ発信し、同じ課題に関心を持つ近隣の小、中、高校に通う若年層との関係を構築する。**

コーチは海洋学部で教職課程を履修している学生約30名が担当しています。本来はメンバーを固定しますが、授業等の都合で毎回違うメンバーで実施することになりました。そして、コーディネーターは、清水校舎で教職課程を担当している富士原先生と私、附属小学校社会科主任の清水先生にお願いしました。

### ➤三保探検の授業計画

1回目は、顔合わせとして児童と学生の自己紹介等を行いました。2回目からは、校外での活動における交通事故等の危険性を考慮し、歩き方のルールを決めることや、注意点の確認等を行いました。そして、清水キャンパス探検として、児童と学生と一緒に学内を歩き、歩く練習をしました。5回目から三保探検の計画を始め、世界遺産コース、工業コース、観光コースの3コースを学生が設定し、プレゼンテーションを行いました。そして、児童がどのコースに参加したいかを話し合い、自分達で人数の調整をしました。三保探検は7回目に実施し、学生がコーチとして引率する形で一緒に歩きました。8、9回目には、ポスター作成をしました。本来は、原因と結果を描くパワーマップを作成しますが、今回は、ひとりずつ思い出に残ったところをポスターにしました。そして、今は10回目の成果発表の準備に入ったところで、観光客を増やすにはどうしたら良いのかについてポスターにまとめたものを使って、最終回の成果発表ができれば良いと思っています。PAの成果発

表はプレゼンテーションではなく、セレブレーションと言います。今回は、保護者や地域の方に来ていただき、児童と学生と一緒に発表してお互いの今までの成果や努力をたたえあうことを行います。

PA型教育の試行の各過程において、学生と児童が主体的に進めてくれています。そして、今回の流れをDonovan氏に見ていただいたところ、「最後の発表が非常に重要であるため頑張ってもらいたい」と激励をいただきました。

### ➤中間結果と今後の課題

長年、インタラクティブな授業が重要だと言われているため、授業の共創(授業は学生と教員が創る)という考え方は定着していると思います。しかし、これからは、社会に目を向け、社会の共創、パブリックワークアプローチへ発展させていくことが重要であると思います。今回の試行によって、その手がかりを得ることができました。そして、最も重要な結果は、児童と学生が世代を超えて、同じ若年層として学ぶ環境を構築することができたことです。これは、youth engagement、若年層の政治参加にあたります。また、児童と学生が地域について同じ目線で学び、地域に対する愛着を醸成することができたと思います。

今後の課題としては、児童自らが地域社会の課題を見出し、どこと関係を持てば課題を解決できるのかということも選べるようにしていかなければならないということです。今回は観光というテーマを予め決めていましたが、どういう問題に着目するかということは、PAで一番重要な部分であるため、児童が主体的にできることが今後の課題になると思います。また、現実的な課題としては、小学校では授業として行っていますが、大学では授業ではなかったため、保険の問題や、毎回コーチを固定できないことで小学生が戸惑う恐れもありました。そういう意味では、「PA入門」、「PA実践」等として授業化することや、教職に関する科目の中に取り込んで、授業として学生が関わることができるようになる必要があると思います。最後に、今回は児童と学生でしたが、本来はもっと地域の方を巻き込み、ステークホルダーと関係を構築する必要があります。観光振興の例としては、三保独自のお土産物を近隣のトマト農家に作ってもらうこと等を児童、学生が考えながら、地域の人や関係者を広げていく必要があるのではないかと思います。地域連携として、いかに地域を巻き込んで今回試行したことを広げていくことができるかが課題になると考えています。

